国際交流センターだより vol.5

7月20日、「海外リサーチ・クラークシップ研究成果報告会」を開催しました。2018年度に海外の研究施設に研究留学した医学科5年生15名が、帰国後も継続してきた研究成果を報告し、学業と研究活動を両立する日々で逞しく成長した姿を披露しました。報告会終了後には表彰式が行われ、嶋医学部長より最優秀賞と優秀賞が授与されました。

参加の学生たち

MESSAGE

国際交流センターセンター長
嶋 緑倫（医学部長）

この度の海外リサーチ・クラークシップ研究成果報告会では15名の学生の皆さんに研究成果を発表していただきました。5分間のプレゼンとは思えないくらいに密度が高く、学生のレベルをはるかに超えた研究者レベルの内容でした。発表後の質疑応答もとても活発で感心しました。この経験を生かして、医師になってからも研究を続けて国内のみならず国際的にも活躍してほしいと思います。最後に、これまでご指導いただいた所属研究室の先生方に厚く感謝申し上げます。

教養教育部長
酒井 宏水（化学教授）

海外の研究機関から凱旋帰国されたあと継続して学内で研究した成果を拝聴し、審査をさせていただきました。皆さんが堂々と発表し、質疑応答している姿に、自身が留学先から帰国した当時のことを重ねていました。学会発表、論文発表にまで到達した完成度の高い研究成果も多々あり、皆さんの努力の賜物であることは勿論、ご指導くださった先生方の貢献も相当なものであったろうと拝察します。今後もぜひ研究マインドを持続し研究を発展していただきたいと思います。

基礎教育部長
堀江 恭二（第二生理学教授）

2年前の帰国報告会では、海外研修で刺激を受けた様子が前面に出ていましたが、それに対して今回の成果報告会では、2年前の経験を実際の研究成果として結実させた様子が見て取られ、実に頼もしく感じました。医学生としての学業に加え、時間を捻出しながら研究を進めるのは容易ではなかったと思いますが、きっと皆さんの将来に繋がるものと確信しています。最後になりますが、学生をご指導・ご支援いただいた教員の皆様、事務方の皆様へも厚く感謝申し上げます。

国際交流センター副センター長
森 英一朗（未来基礎医学准教授）

海外リサクラ3期生にあたる現5年生は、2年次の冬に、それぞれが希望した海外研究施設でのリサクラ研修に参加しました。今回の研究成果報告会では、その後の2年間に学内の研究室に所属して研究活動を継続した成果について、御発表頂きました。2年生の春頃から始めた事前準備期間から数えると3年以上の期間、研究室に所属し研究活動に従事したことになります。学部学生の学業と両立しながら取り組んだこの経験は、本プログラムに参加した方々の今後に大きく影響を与えることが期待されます。

発表学生一覧（氏名・所属研究室・発表演題・留学先）

■野津仁志	（第一解剖学）	「Neuronal responses to stress during development stage in BTBR mouse model of autism spectrum disorder　発達期における自閉スペクトラム症モデルマウスのストレスに対する神経応答」 （Monash University Malaysia ／マレーシア）
■森川成孝	（未来基礎医学）	「神経変性疾患における液 - 液相分離破綻メカニズムの解明」 （University of Alberta Hospital ／カナダ）
■佐々木俊秀	（消化器・総合外科学）	「膵癌肺転移におけるT細胞抑制因子と局所免疫機構の解明」 （National Taiwan University ／台湾）
■小澤享平	（免疫学）	「B細胞におけるヒストンメチル化酵素SETDB2の発現機構と機能解明」 （Sidra Medice ／カタール）
■小林かれん	（薬理学）	「ミトコンドリア融合が自然免疫に及ぼす影響について」 （Medical College of Georgia, Augusta University ／アメリカ）